飛花落葉　全

へ 5
786

門 號 786 卷

世に誹諧をもてかろきみちなりとし尊ふある
まふきもとひたゝめなく奴婢僮僕のやから迄口
母ようせてちくさ又いつはりいひしらひおれはうへ
何さもうふるをいれとかの歩ゆきと其徳は難波
津浅香山は山の井ほどとなられて人倫をかし
人のかなしきを知るをはなくて和哥は徳ふか
からすや和歌にも誹諧神ありてあるれはうち中
よりわきまへるみや何らんことあれはきよくも
近くも誹諧に名ある人の名句と言ふ歩ゆるは其心
幽玄にして其姿又妖艶なる詞をや変して見せ
と得たし人はまこととなりつ付よりさいてとふ家なし
やね筑波山をやりたけやりかへ入るも本よりちかを

まことを志をりにして況く佳境に至れり年ふるまゝに
是右高く世になりてまた達人の口にある秀句ともいへ
誠に一唱三歎するに堪たるも有ける此人年比心に
こめし俳諧の心用ひを記しき門人のこふによること
二始に清むして狂言とゝもに名付るきはしをと
これはむ人の張りなき故とかりぬべきも譲の物せし
みやきれは序に其趣を書の始すらは付くべき
よしやら捨へと我まゝならぬ道なれはいふかひの浅けれ
いふてそと固辞しける物らをもて此むるわざ
らにわつぐ移しぬへきはをまもす人なくて筆にまかせ
侍る物なり

以敬斎 長伯 誌

俳諧の道はあさきに似て深く卑きに似て清らかは
まことし初心の時は浅きより始めて次第に入りて後は深
きより阿を知らず出とを聞しむかしは人の心すなはちに
初中後を経しこと今は更修行する人まにまれし
心皆さ知ふはしきては清らかは人みゆるさぬ且事り
なるまじうしこれをおもふに俳諧は只宗鑑の化口なる
様もなさはひ捨草ならとるき事にならもへ承るへし
是もまた和哥の一躰となる時はいかにも浅く戯お
もふべき道にはあらぬをいなき事なり侍る
大かたの人は口に誦きてはひ清くも成しに道の達者
ならんと得て更に我に益ある事をさとらて俳諧は
只ことにもと清く中正なることを心を寄せて修行すへし

孝といへハいつれ人の親ありていさゝいきまから行んとき腹たゝ
しき心の出る事あらハ親といふ前句に子として腹立
そ袴を付句とり取なして見侍るへし〳〵の
罪なしうはあらしまた折枝乃よいれをとられしぬる
心ならハよくなしもてしさいまハ親にむかひて蜂吹い
諫慮にもふくませ給ふ所ならとおそ出て孝心ふかと
つまあるは人ありはらふる身代慰心むらうにつさふいれて
用をうしろになき心にも付句に取るなしてる神を
改め或ハ他人のおしハりうたに四海ミな兄弟なるや
心のあやまち改つき常に門よき俳諧をあそらへも
此心を又清くすれむハおし事に楽しよらハ自然の
句毎にのせぬし見ても出来ぬへし

一さてゆるの句或作りてこれを新しとおもふ人ハ此
道を深く尋ね見ざれハ遠きにちかひあらんや付
らん詞ハ古き或用ひ心ハ新しき或用ゆへき也
一座にたゝおもしろき付句の一二句も詠きこらん
時ハ其より後も拝まもとしる句或せんと太ふし人ハ一天
ちからを入千萬ハ付出といふみもろもろとなり句
ある人ま辞也只ハよふ或しくと独りもくる果し
いらハ志らも能句の出る事ハいふくや付らんはらくと
成りならしる　〳〵　更に能句を出来ぬへし
程よき遠句ハ未練なる人の及ふ所ハあらし
一發句ハ月雪花木ゝ艸ゝ其外生る物の多くハ名
べて何にてもあれひとつくに拵いきたらんありか

くはしくも我事をいひとほしぬる物なと深くよろ
こひあん心詞にあらされは皆ことさらにやあらん
一 用句はのまなひしきを事一なりし宗祇法師の雑
談にも上手の付句は他人の中よりおこりまし下手
のは説類の中あしきにたとしといへるひかるそ
一 句を作るにはすらくと詞をのへ工を丹あれは何へとそく
れし只心は深く大きに姿ことはにかはらぬこそこれ
ましれれ古哥にもあり詠古事をもあひつこすら
楽しく推りて句は作るとそのうちにからふ所なく
用ゆるにはちらひあらんか
一 句は師匠のかたちによく似きて仕習ひ修し
得らん後はみのふへきをたふれて大性ひとりくら

得たる風雅とこそ用ひまほしけれ
一 ある人歌も俳諧もならぬ物そ少といひなかに其
ふらぬままを知り多くいふひとくとの事にて侍る事は大性
数寄く此道にこころを尽す事なきを四十年は
あかまて行に此道のことも忘るる事なく何時の
くら悲しとりに硯を置く寝さめにも外の
迷いは道のなからへしといふ所は辞もひよふに似て
り平生深く心をもいれきたる人のならぬ物とおもふ歌に
いひ多はふこそきこえ侍
一 俳諧をもてる人あらはしらもいひこそをはたや得多り
歌に出きる句はとくにえいふくそ付る或時は句を
ふりやすき中にあるへき又或時はひつすらなりうるをも

なり侍らん事疑ひもあるべし深く入らん人は
其程々に切つもりて積むつらしき事を究はらん
修行の道に限りありときはなりて此上なる奥もあ
らじ只険路の少きは修行と知べし昔へは
宗祇法師は連哥の達人にて余にまさる人もなしといひ
ひつと祇公もとりにて年しは今もとを為給ひて五年の
功十と詠ならべしと為て十年の功も肯つべきことぞ
新しく作り出る句はやうて好もしきなるべし只ことし
なへに古くもならず又あるに深しくもならぬこそ能句
といひは人々や作意にのこりかくさせていふ句や
侍ことば深く案じ入て一句をなすべき調にかいはらぬ
との差別なるべし

歳旦の題にては只春の句にすぎぬことなれば元日やとをく
いふ元日の句なりとのみおもひて心あるはしきはおかし
花の句は花のこともいひ月の句は月のことをいひてしらく意味深
きはよしとはいふかすかに案じたる人は句の心にもち
らぬきにはなをとて多くの事ぶりを入まじくたちもひらきそ
のはらず工夫に入るなるべし
いつたりを除きてはそなのこいひのがんとちからを入れて
案じ侍るは修行つふにはまをとこれとこ許も工夫へと
成作り出る細工の句あるて侍り此道を修し得ざらん
人の虚実の好みは川に力も入まして、いひ出せる句毎
にはいつはりなきこそもの法られまことはいひ侍らんれ
是なん常の心に修りなく世の名あるもれも深くおもひ

入句る坟なし

一 かの俳諧は来る誠日の実行なしと前廣に
定置て詠草に刻付して再返まさも泣く〳〵多れ
ハ句数もいて花付り南に至りて或は朝飯後よりはし
まり多るは短冊をも読て終り又昼過てあつまりぬるは
大かたこれをもちらくと吹とらる程にみちぬ今時の
俳諧は再返をことにせはまた事やあれ〳〵なり俗れば席立
の句数はおそらくは多しと満る所は一の席とれ
三合の一もと定らば古人は各沈思して毎句毎に宗匠
の心をうかがひ宗匠は又坟なき句を取る事なりける
前句に不便をくはへあるはのずかりて或事一に果
しはりき詮はをのはたらき時のうつりたる〳〵べし

一 作意をいひたてる句は心なき人の耳にもおもしろしとや
たのえ侍らん又おもしろきは句のやまのなきとて流し
得たる人の幽玄の句一派の心なき人の耳にはおそろしき
かなよふる事かたる了しまるもその詞やまければは准
もいふべき所なきとやおもひ侍らん

一 句えぬといふ句は幽玄を不首尾の差別侍りぬと或
弁へぬ人のさ漫くに句或作りて是にても未だ見え近
くおもしろからしとひさぬきに詞をぬきて洛あり何の
事やらも見えぬ句なりなせて侍れど作者は初一念の趣
向をさつ路に忘れ侍ら称は我から独り歩ゆるにはなり
まさくいひたるむるはらこ聞いてし又幽玄の句は
多なきんをもて其意味のあれもしろきところを出得

なるべし
一 祈祷の俳諧興行しては一つらぬる前句は作
りおかきにはらでか神慮にかなふべき句毎に清きと哉
弁へ萬人の好くおもひ立べき事にあらずとも云
なかにもとりても清る御祈の分でも連座に着ては
各其日の神主なりと心を改め又御殿のかくらきる
席には心のうちより勧請して在すごとく作りまし
人いつものあき句も出来ぬべしや
一 追善懐旧の俳諧も清ことを成すにはさる時はこれ
も佛の道に至しるむき侍らん
一 花の句は一座の宗匠または功者にゆづりて努しの
まへらには貴人小人なとは花を和して得べき品

も侍りまたともに宗匠の言葉にも随ひまして外より
會釋まへつきるにあらずむかしは月雪郭公此
類ひは功者の外遠慮もしつれと今時は見つうち
とも弁へまいつしか其道のおきてもとく失ひ侍るも
おろしつり儀より注習ひ得る作者は斟酌あるべき
句なれまへをもならべ見なけらしき事こそ侍る
一 發句第三などは多く作者は花の句試せさする楊のや
うにおかえさるもわらしくこそ
一 脇句は文字にてとめ第三は下留て留らん留ことを
なしといふとも定め侍るとなるは誰も皆志る事にて
侍れど何故とは定置なるといふ故なる所以を志る人
まれなり又脇句のてに留第三の文字留なれや

要なとくいふ事もあまた有り侍る

問 表の十三句めを月の座裏にては十一句め月十三句めを花の座と定侍ると又月花共に取あまきくする時は何句めにてもくるしからずあまきは月花の座とは何ゆへ定置るやといふ事を尋へ申へ志らせ人は侍る

答 花は梅花をいふにあらず正花の外ら桜は譲し事すこし未はいふにも及ばずものあらは何をさして花といはんやと深く尋ね入座におゐてにこそ

問 鎌倉の右大将西行上人に弓馬の道を尋ね給ひし時馬は大江の千里が月にこそみれの哥の心をもて答へと語られしと拍子を心得こゝろにて即座に馬の乗りかたをさとり給ひしとぞ

俳諧にも句の有と拍子に上手のうへの志をまなふへし

問 秀句をもておもしろく作り侍らんよりきくはるかにいふ多りなるしと古人の詞にも見へ侍る其にもあら随ひ侍らん道なるへし

問 發句の動くといふ事侍りなとへは法をなす句哉まみ迷の句ありしてはへさ又の秋にも不如杜若の此句をあやめの句にしてみれはなるをこそ嫌ふなれて付迷余はなそらへて嫌ふへし

問 心をなをして生移つきこゝろ人も俳諧にてはきゝこゝろのみはひらひらこゝち実躰なるもおかしく異形を盡せる人おゝし俳諧といふ物はいろなる事を並とはあせるそと深く尋ね入まんとすもなく口より出るに

まかせていひさまざまなると只ひたすらに変化も
ひとまは顧ず道を弁へざる故にいたる心ままなるをなす
人俳諧といふことふるそ法きて世に交ふべきや
又風俗とうつりかはりて世にうつり交る人の衣服
小唄をもる種の模様をそめ或いは羽織袴の
上に甲ら烏帽子なんと成着して人中へ出よふと
いふは、おかしきや能く考ふべし和哥俳諧は和哥の
はちれいは心あ様として和哥のことの葉と成り目にも
見えぬ鬼神をも哀れと思はせ猛きもののふの婦をも
なぐさむる道とこそ申し侍る俳諧を修して此ことを
道を行ふはあらけなき人ならず情をしるもあるは
不孝不忠の人も不の字なきとをさとるべし二世なり

交はりて伝しむく前句に立てひとつく付句なり
取ちなして未見えて前句と付句と肌もあはせ
のでもふしそのなき時は是まことの道ならしと多
しまみ数なへきこととこそ
人と和連と常いふ詞を句に作連は悪き俳諧な
りと弁へしならざる人は付句の味ひをも志らず事かなはか
るべし
古風もむかしは当風なりし今はた当風とおもはしき
句も又いつしか古風となり侍らん古風といふも当風
といふももとに作意を求める句のすがたによりて新
古の名はあれど修し得て此ことの道を行き人
の句は我とを強るとも新古の差別はあらじ只この道

に深く心を入なん人のまねびこそあらまほしけれ
俳諧の旨る道に入る人は會に連ることを専とす
其句に心あるもきこえたに並てたゞし隣人の置たる句を
もて案をめぐらすは其句の勒に力を入ることなし又連
てこそいふことはあるまじ心をつくし深く思ひ人の方法に
心をとゞめてよくよく我もひをつける趣向のある地より求
めなして其句のするらまて出るなんを程よく句に
作りて付けおし付るいろの道に好ましき人の心懸
とやらんいふもひとつなるべしや
秀逸の發句といへるは古きこゝも何とらへておもし
ろき事も見えたに只詞すなはちに出けるとして其人
意味口をもって述る事かこときをこそいは付き是は常

に詞を巧みよせてる句なれば面白き事に覚てもて
はやさるゝ人の事には師かよふべからで世に用ゆべく
人の称しつる作者の秀逸を名に負ては發句
なれ共其の座の聞えさる悲事は我心にかなひと
たのしまず修しみて又付らば自然とおもしろき意
味ともなる事あらんの句にも至らば自句に
秀逸をもはらきぬ一小細工のみに心止まりて
我とおもしてん作者は終に人の句も秀逸を
聞得て身のしむべきちからもいらにまして外を
修するとて一句のめしとも知らなん事を思ひ付らん
此道を修し得らん人は一つ時代の句を作
まてきかせよといひて称くに句ならずまるはいひ

あらはす事あるまへし修してこそ一句は狂
言はひやうをたゝすにはあらんすへて細工にわたる斬む
つかしき事にはあらす只ゆくことは深くおもひ入て
句のきゝはゝ其時のうまれ次第とあきらめなるへし
人の句はきゝはれも一様ならぬ狂吟の誹諧をとは
附く自然と心のうつりて見ゆる能事なるへし
未練の人に此不昧しておりよとつくまねても
及ひかたからはあらん一心ゆゑにむかふかたよりなる
作者の狂吟の句はかんはらから能出来て流ゐに
ほつ心に化のおふへきにはきんや今の安取をや作り
なるなる句はひやかましてとめなる句はひかなるらん
ろの専らに心を流きまはらて他念なく修行まつへし

ははあやかりをちるへし修行なき人の器用一度ん
にて及ふ所なき事にはあらんに天質上才覚故まて
ならん人さゝ道すもなし
「俳諧の修行といへるは只すゝら句を作って其の
味はひを稽古して平生人すゝ交る故もすなはちの
まことな用ゐていつありなきことをむねと心得なるん
をこそいふらんなれ
「我は俳諧を仕習ゐてよりいくとせを重ねぬりと指
をかそへてちくとのみ修行ありともいる人は心得違ひ
も待らん汝ことの道すにこゝろをよせいかして句のうへ
をみてはいふまてあそひなる作者は多とひいくとせなる
とも其の益とはならまやはらん

俳諧に地自句など句格外しといふ事侍る也
といへるハさのミおもしろき事にもかゝはらずして前句によ
く法りてとなるをいふなり自句とはひとへにおのが手くせ
をもておもしろく作りなしぬる事なり遠句とは甚の
あまり能句なれどつきあらん上に又はむつかしき事
句にてはふるき所をかろく〳〵と流きゆけ附りて程よ
く中も多るをわいひ付らん格外といふハおきこゝろ所
更に前句にはよそ〳〵しき句とも見ら所と庭にてよく
はなれてしかも感深きなどいふなるべし
百韻の内地三十三自句三十三自句十七格外十七とたへ
のいひけるはあれども句の数を甚くもくるしきを
よしといふにはあらず百韻皆流きつゞき一様なる時ハ

見るに能なんといへる心なるべし
連俳の隔ハ遠く見る時ハ近く見る時ハ脊を
合せるかごとし例へハ東西にわかれ行人の一町
きる時ハ袖をふれ合ふ程なれど東へ行ん西へ
行んとおもひし時ハ其ひらき所よりはるかといふ名のあがる
如し俳言の流によらん句は一歩よりはるかに行なる
人の志をはなはだ隔るくひあり又言葉にもあり
うにしてあきこゝ所に連歌めきたる句もなきにす
而連歌はいきかりなきるハ全く俳諧なるべし又俳
なん皆合せる人の東西へ行ふ気を生ずるなりや
あるは又連歌といふまじき詞つきをもて俳諧なり

といへるあるくひも有ぬへき事にあそ侍らさらく只一句成
さらへる論をせんハ又一際ふかゝいかゝる事なし
俳諧ハ連哥をえとして連哥を忘るへしと古人
乃詞を此見て侍りしか、
聞よりは句よりは此句の事大かた人は俳言かちにいひ
て句からたちかためしく作を或ハ文字を替ていふ
芝居ものまねにて治よき句なりと覚侍る心もちひなる
へき歟乞食といかさ河なる人の喧嘩しんそ付其を治
されから勇士に似るれと庭意に死へき治ともなく
只人の恐るへき様を作りされハ死ぬへき場なし
をよひて逃侍る事すまゝやあるらすとし又侍りとも深

くれもひてまこと詞柔和に仕立て試よハ此句
なまとい一趣も又心得違ひあるへしやまとへハ物とり
めし侍る人の作あひて我もあやかりなき事にも
詞を添へしてやつらなにいひたる時ハよいかりしやうな
見て侍れとやむ事を得さるにあらてまた一旦もきらは
れて死をきハむるかたとし治ことまさなりしはよハ此
句といひまことを以深くおもひ又なんとはよ此句なりとい
いふなるへしやその虚実をも弁へすして句にはたらき
詞ものしかゝりて強弱の沙汰しらん人ハ未熟
にしてのとつふあやまらさらん事ありぬ侍らん
川へつの俳諧師ハ一日の稽古より一日の座切と

いひて只會ヿ出なんことを大切に思ひ侍りし實
山野水邊居所の作用或ハ句作いきおひきらく
さし合ホ輪廻の沙汰抔計り詮義まてくはしく
付様ハ一日の座切も大切のことにて付し
句ことに深く趣向をおもひて言葉のつゝきも詞なりしかり
きるはなハあくろ付る心を詞をよく思しつらん句或
ることを有りしハ侍らなん
詞をあらたに仕立らるゝ句或事一なりと一際ありおもし
ふへからぬ俳言をこそはしかるゝりこそたへかたの
懇にこち侍りつれ
宗長法師か雜談に付句は只前句にたよりて

たのもたれたる雑るやうに有つりまをハ蓮の葉を引切
てゝまてしたなれやならして云々絶る事
ふし見えきに於哉の前句の心或捨るハ蓮の
へき或切るにあらは夜縁をひろへ寄合をも是を何
あるハ糸のつきさん侍るを俳諧を又ともに信を
應きことにこそ
いかしへたいの書或あもといふたる風しくよ発句
を書付く撰其人の名一をくつり侍り其内長点
うける句或小短冊あり書留をおてくハ侍ら
を今ハ初心の作者ありまて此句を大事にし
とくなして書付或ハくり侍り又其頃の俳諧に

一吹をゆつりし侍るもつまりしへハ付句を高ぶりして
宗匠の心ならぬひが坂詠草に出付侍り今ハ付句
も作者の心ひとつにてきこゆれハ是へうかゞふよりも去りて
あまくに書付てまいらし侍りかくして法外の事に
ふりる体物られどころつまりもふし侍る
同しへハ名所なとふ物をもて付る句ハ古哥にても
古事にても慥ならん証拠な地句に付させ侍らし
某ハ末々迄も見ゆるる比花師松江の翁と梅花
翁と烈座の会に出て
ちよと見にも近きとを吉野山
といふ前句あり

腰かけて屋をとさけて旅らし
と付侍られハ吉野山にふく一其故者西行上人師の
とゞめおひける程に当惑し前句もつき前句ともへと
句前もきとく付る間付へきやうあらハろの体付よりと
ひこまらやき詠る程なり今爾のころをいひ出し
と一座の人やがてつとこわれ面目ふくて
花よし野の花の盛をさ祢とひて
いきこゝつきこ一首道ありゆし
と云ふ古哥にすらまで付侍りきと両座の作意を
もて此哥を接て答るれハめつらしくられハ何に
あふ歌にやと尋ねられける程なり気しらす意ふか

夫木にて見つるといひき発句ハいやしくて執筆に書を
ら給へるつらあれハ師の心をかすめかく終りをもて
もこひあるを懐紙をけらしふる皆らへすりくを追
ふれむきし事今になれそろしく付る其外
俳諧をこゝろ文事に付てもひふしへうるちいさ句ふと
ひとつ〳〵世へ出さハ多量のあやまりも侍らん
一 元禄十七年の春去来か此のたし給ん或人のもとへ
行れるに床に世之乃像をかけて発句所望を
せられける時折節し齋宮かき日雲てこゝめ済ぬる
中に雛の梅のたくさく咲てこらおろかくつきたき種
えり見て侍りぬれハ

雨雲よ梅を星とも昼ある庭
とふ句成済らりまつりぬかきこれ案しめぐらし
たる中に如き蟻通の詞をおもひ出してより此趣
向をらへ來りて此ありへ仕立る句そ侍り惑
説をも弁へおしてうつと心得られハかくあやまり
なる句をも作あし侍りぬあへてもつらしきるを葉
し大事時より此趣向ほうらる見るハ日てまに雨得
らんあらしてやうこ句を化を付る事大きられ
人の常りて付る其時今一らつし返して真ハんのうち
小吟味有へき事にこそ
一 いかしへ宗武宗鑑連歌に対して俳諧を興へく

貞徳立圃重頼等の中興して専ら世に行ハれ此道盛
ひらけしより其調ハ式こそかハりて初学の
人迄道に入易き所なれとも猶ひよりて其後梅翁
宗風を作りていふ貞句の姿調花やかにおもしろ
きこれハ人皆好みて古風を捨て其宗風にかたふき
付ぬる頃より猶さま〳〵に移りかはりていはんかた
彼古風をうしなひ侍りき其古人をしたふ人ハ此葉
の世なき侍りて風儀乃らはりゆきしまより
学ひ大かた作者ありのいまし人をそしりつゝ我ハ法外なる
事を法外なりともしらず或ハ又今新しとおもひ
事仕付る句も古来いひはくしつる内にあまて

古くよりし事とも耳へきくひもたてゝ侍るニハ
句作するにハいかやうにも作るとも古語を
とつて其心をまて心の庭に置たらん作者ハ是を挑つ
から法外の仕方こハなはかりしき事なる侍らん
予稚くしハ歳に成る比ハあけなき発句しえ覚て
より十三歳の比松江維舟に師のちなみをむすひて
其の翁の古風をまなひ此道に心をいれて不断
独吟の百韻を作りて其の比名は立は古老の
ことくへ送りて点をこのみはるしく巻をいふ
其数をしらずかくて十六歳の比より梅翁老人の
風流花やかになりはりて又貞中風をいひ習ひ狩貞

のみ哉ともいへ侍りて文字あまり文字たらずに或ハ寓言
或ハ異形を好くいひちらせし此發句付句あり
よろづ人によしといはする我心まもたもしろかりし
やうに有けるをも修行しけるなんもなくてふまて所
よき發句を有へきやうハあらしとひとすら我心あり
ふるひを起して予りちころをとくむる事なく思ふ
付いふしへより今の俳諧ハ見れ詞多きんそて一句に
きらくなるくハせらわして或ハ色不をかきるのこそ
心構しほらくよき哥といふをたもふあり詞あり
巧ミもなく浮みし色不故もやはら須只を低くやし
よ見なりして志りも甚心深しいふしへより俳諧乃

發句をおもふ耳

青柳のまゆかく岸のひたひ哉

まん丸に出れとながき春日かな

ろ津ふつてあとらやつゆやみんのひ

山伏ちまふとてふれときん柿

まづその比中風と聞えし句

摺小木も紅葉しにけり唐からし

これらハかの宗祇法師の流れ非道教道非正道
進正道といへる哉てひ叙て一書ハ俳諧ハ狂句
作意成いふとのミ心得たるより一際ありやよるへ
き道ともあらずに狂深き奥もやあらんと延寶九

年の比より骨體をしと致して物ゝ心ころも書
なくハゝ五とせを経て貞享二年の春はことに外
より俳諧なしとおもひもうけしよりころのおもむき多る
色不もうの一句にも少くとも十とくをくらせてる称く
お皆るうらぞなりぬ
問 修し得ふる人の物ゝうきをうち津して未熟の人より
むかひて我志を歎すりいへるも力なたひとはろゝのこと
まつ信してけふ達人なりと抑もふをよろこふ筆
ハかこしまろいをまでは及ぬ道ハひとすら修行
し付るべき我念心我もちらもし寸労をも作いやき
ほとて口先をたて上手なりと人にゐもハ称へん

答 こを我このむところこそあきらかなれ称
問 南时まてをかや俳諧の中に林句我問あ人と
語りし付る我前句ハ何といふにやや間人あ称ハ今时
前句を尋ね多もふい有も古めかしく付る当凡い
前句ふんとふる事とハ寸とふ人なくもあまりけ
千万ゆゆくなくこそ付也
問 いかにー談林風伊丹風なといひて句をさ協く
異旅を作くもし时節も更に前句を忘るゝ事
なく或ハ文字なけれとくほかりしつる句も付称と二句
隔るは拉を出らいるというふ可らなりし
答 此かしへハ一二従百韻ハ俳諧をも句毎に莬んて

或ハ帰りて人ニ出あり或ハ悪く書写なんとし
侍りし今当風なすといへるハ哥仙の句なとにおなしゆ
る人なしこ詠をたもありいひしへハ縁語を作るゝ
ひて付けれハ一句く柳ひ出さはたふえ付らし
今ハ其句ニ縁語なきこと於詮なりとおもえて作
る立句る句して付きハ何とらへてたもひ出へき種
もあらしひとつへハ前句にしたかはさる咎なきし
祝儀の発句ハ万のことふきをうへ付り直ニきめて
句のうちかゝちた手柄をこのむへからそ付句ハ多くいむ
へき詞ニ触る心をえこめてまでし
同季を付詞ハよしとのミ心得てたとへば正月

の句に二月の物をつき四月の句に六月の物
をもて付る作者も侍り付句ハよく〳〵詮をきこひて
時節相違なきやうにすへき事専一なるへし
恋の詞をさへいへは恋の句なりとおもひて無情なき
句もおほく聞ゆ付る詞ハ恋にあらすしく付るとも
心の深からんこそ恋の実所にハ付きたらはあはれと
俳諧の修行もなく心のミ多くらくとかゝりて妙所
を仕体らハあへてひらことも成体らんか
同鳥ハきく郎公ハまち侘るこそ詮なるへけれ鳥の不る
四季折くの草木生類ニ至るまてひとつく
その物くをさらへてらくいしく所詮を弁へ志るし

て句中北をよみしぬへき事こそ侍るらくひをつけ
まらん句を郭公もいひいひらへ梅つきくらんときくら
すいひらへ弟子句にふらもてしや物の所詮を弁
志ふしふんらそ第一の事すへけれ
同 春の月はくもれるもむるより朧こちて物たらぬけしき
同 夏の月は灯をきえく置て詠め深し
同 秋の月は窓より軒端海に川ヲ野に山に
同 冬の月は一むらの雲の雨ふりし行隠をみて
いそあし
同 春の田は物こもりて淋し
同 夏の田は葉末晴て涼し

同 五月雨は欝くとさひし
同 秋の田は庵より淋し
同 冬の雨はさるとにさひし
同 東隣の人悲俳諧は春夏秋冬と五文字言ふて
し付者多ふて出るといへ一十姑きあめと付理
体こんといふこそ心ろてき様

かしこまつるほとにあら玉の年ほのしの雲乃引にかゝ
比鳥の音なやゝ花やかなる賤か打あり競立なる妹かあたる
しかの漸見渡されしく振ひなるし家々くりかんなと
いもひあつらけるまさしくにむつましく門々には松立ふ
るくはなやかにて千とふさいひうはさ人乃往来も二日
三日まてくは常しの牛馬乃通ひもなくてうらゝかにあ
るは遊か為に年はしけしの人もあるか折ふしすな
んとしたるもいおそろしくうつまあ
一梅は新の当波乃鶯もなく鶯も名のみちもまだきたなれ
ゝとはやり一輪乃ほころひ窓ちかく枝を折入宿の中くまもの
かをりけくまぬ乃はなさきほこりて梅こそとりて人の心をも
あくまあるはかく山里乃折々垣に見ゆ中るもやさし

実咲ハいつの比誰人のまち侘くおもひよりけん実
あさからぬ戯事にまかせて咲出る花乃心とて
ものゆかしな徳

うくひすハ春めつらしき翁より障子なるはる月
翁もめなやらふおもえきのふ帰路山もなしき花地
くもちさ移れ水もとの清ろなの清ろ此春もなもれ
よしあしきて霞有作ひ花をりあそふ又青葉ぞ

杜若すり晴るはりひさすらわしき
蛙ハ水乃庭よて鳴初まり上り出る雨こふ春も
あたれり旅ゆあ徳ハ古人の宿なつかしきある
は旅も生ぬら野有りなく春の枕りほとふ寝
覚るて常ゆあら旅

柳ハ花よ雪もな様風情有花あり水有ひら徳風
有しとろひ毎春あり音ろく夏ハ笠なふして体るふ
人を霞む秋ハ一葉の水りうろえく風有あゆとゑ
ふちくれ有杉もしろく雪もなかの深し

桜ハ神花より人乃心もろ祀くおさまれふ衣ふ
くれ家あしこ咲も猶しめ折節花もとぬ木の
梢しりうはりしくくる神をみあまもらんと歎
更居けに雨降ゑうたてしとうくして春も末
有なるゆきは散清く世乃有様を見ゆき
とみ来る春を常ゆ世もはそふしあるは遠山ぞ
くらつ青葉ぐれ乃遥さくら若葉乃花風情と
めし一様なる寸桜ハ百景有季れて古今まろ人

乃風雅乃中立とす
「桃の花ハ桜よりよく肥えてにきやかなり
「梨子乃花ハひそかに雪めかし
はし藤山吹ハ是外名持てる柳古今にとる
まり古き詞をまとひ只おもしろし山吹乃しな大そ
山吹てなりむる人おほし庭より詠むる人ハ我心を
わり道ありく人して折ても面白きを不り又及し
其感より出るる発句ハ其の意味を鮮ホり述るす
るく世を得るし
「躑躅に待くまししと人乃えるくしハわか葉時をけより
草くにあふるハ出て吉見れ清くまたあり春日わし
きますてなるへし

「卯月朔日櫃くくき花衣乃袖より手にし入るより升
りうろく気色ひときいらつりて花中まとうれくて鶯く
山さやの声ハはるまてそいひのたし
「郭公乃比ハ誠り見れ空りん桃の月有あ
こう神雨りあるくさま袖にもきらぬ折節しつも
し笈のうちるや皆いふる人まや聞つらえと称さめ
をうし又と雨けろにも此清るねハなほ珠あるく
人乃家より久まて出る待ハいふろるんをやしいひをと
りるとをゆるし
「蝸牛草ハ旅をもえらねくして
「若葉ハあけなきてかくうほく
「卯の花ハ郭公とゆりよくある同日を見て闇をいき

神ゟ見て窓ふらす
「祇樓ハあつく数杉もしろふしきり見ゆるさんのうち
ホなるあ晴るし
「蛍ハひとつふたつ見ゆる神ぎ新て夜道行燈むら
淵田乃奥り舟さしのくる花とみれば柳乃盛
「蝉ハ日の清ちた徑き啼くるしけれ夕ぐれハ淋し
又山路ゆく折ゆ行指の葉啼引声も涼し
「蓮乃花ハ影乃なかの一入いろ地よく見る又涼し夕
ぐれで深む此華佛の物ゆうつろ帰るまでこれハ
けふまるしかくぬしてちるまでさらのもろさきし見るよ
とし影ふかく賞ふしる観念乃奥ゟあふハ増さ
しき佛性縁り忘心の泥をも出つべし

「涼ハ円阿乃堂華頂山乃山門四條のの床ハ心散
らさんとし又くゝ田舎ハ槙なくゟ下り夏寝む
しろ秋さらすもこのもし
「秋立朝ハ山のすゝき雲乃色すまれ木草れまる風
乃きゝ見しきのありハ淋さんるきおもひなきは
ハあしをのばる情のうとく所なるべし
「七夕の日ハ誰もとく起て家ごと神るそちあるべきの
葉をたらしあるは歌を吟して文り心哉起
しはるへきまゝ宗竹たてふらし雨り笑ふれ舟ん
遊びてあみたふるんずをおもしむ
「桐乃葉ハやまく散りてはきれを青葉まゝ田にそその木よ
りもちやし月乃さえたる日は露へ夜窓新るゝ

晴やかなる心也

一 朝かほははかなき世のたとへにうつりてしるし見るなさけ
しらぬ人もなし佛にむかふる身にはこゝろしめなる
夕をまたぬ此花のなさけやいはまし

一 萩乃はかねの錦をまつてからひく都ぞしられ
人の心乃有るは露にくもりも秋のいろにかく
月に似たるを称せし文にはやさしくあるとも知れ風
情ことにまたあはれなるものし人のます神なり
ちらふえりんはぎ

一 菊は雅なる風のまことしけくかよく忠孝
あり

一 蘭は悲しみ乃花にして草の中にひとり立てにほふ
ちはくらべ見しとくらぶれんはたゝ人に風情を語
しかあるべしなりに風情を那に出で思ふの心乃様く
にほゆるなきものゝ望廉もとめて我なく人の晴
間をしのそれ様を表しるしむもん道のところさ
しうふくおほれ入たんとそ有らんと神

一 女郎花はあさきなさけにたつおもむきにもあはし
よろしくものにてあらしの待うけしられは立のきみ
こし鬼そくは花よ女の情にかよひしなとして雨の
後は物やおもふとあらはれしらふあきの風情
秋ひそく移ゆたんとしまきしれは折にふれて

一 中元の盆には蓮葉に都々をまゐらせ鯖なとふるひ
鯖はしのぞくまれ舟をたてかふる親もとし奴家に

は嵐庭草に水打そゝぎこしらへし有増をお
もひ出して千々にあやまちを悔或は万津乃患
ふ殊さらひて袖さへぬらして初節供にする事の
夕もおもひやらる
頃乃夕は大坂まで霊遥にはるばる行し山よりは大文
字妙法船中より拂大坂は見わたす程遠からし
ありし紀念とわれとわがこちあらむしきなれど
記なく消るも又あはれなる
躍はよそにうちまじり程をいひつくろひ
まだまだ始の子を紀子は聞及親乃
狂わすらひ付添ひあるは付しきめとまさはし
に出立ては何するもなし都は見えねば

跡を見まほしくかへる人ありまゝならで我ならと人
に語りあはせ我もと行ゆきたゝんとしらまほし
紫式部もみおもしろかるは印もむしさけるは女の
手帖子みなと寂おしてまつる我人ありおもひを見
るもやさし
虫は雨もあやなきまで月雛のあはれもまざりおもしろく
明おくる巨豆の柳あまた種なり月の夜は羽ずれ
雲閣乃旅乃庵に也もれ　あま野こそ此風
をきのきしくひ送るまで以て記あひしども時
文粉と秋なきに原の程をも付て紅葉も捨んとして
夜も更ゆく旅を流して何ゆくこゝろなくとよめども
なりさむるる

紅葉乃にしきみふ乃ゆかりきのふの猶錦おもひなふ
又あきはてし時雨をまつもふ時しも寒さふるられたるは
折晴て枝は葉も零下散ちらる夕りこかして
風情らえ色こそかりけらしき雅遊なる遠
山残のそめは耳にかくる庭乃木々さくれり
うきれて見里人の目残さはしらえ秋の宿
覚もおもひあるは名利見て何山のあらし九
けしき折暮しあらめなせそとのひとん綾きぬ
津の里乃袖はなかしお錦ふかさねて也ゆく旅さへ
庭りらめん花の散そとて紅葉のちりて
とふなたり見をのこ法
風はひろらく山うえて浪るらく見果る舟の上まて

古人乃ことに紅葉なふお多く文華ひしくたつらひゆくゆふ
けりとうる皇の遠しかりるふはくの細きらの
をうしおもひなんと妻乃心そ都より
二唐は角あまきらおりまいろ見しきれとおもそうしき
名りは紫らはあるは紅葉乃林り常らまり萩の
もとの月りにゆるの秋毒をくれ友をそくれて秋乃あ
はれをおぼけ侍るあとて唱きのなくし賢き人乃唐を
きけりて友りさえんりけるにけもこおとあらぬ文数ませ
延る常見しは察く志らく里てなく色残なきを
そけは雨よ雅の紀のめくる野には都ふくしや
菊は家の花とえ見えさうふ錦をするる浮さる心地そある

わかれひを乃花乃ちるまへすこかし風り激り雲に
城闕そその数なる風情殿上乃庭にも有らて
錦なるごとく民家乃園にもあまていひをめるの
名し世人これをおそしてちるまでこゝにけりくふさ酒
り一日まつ行脚あり信の百乃旅行ありて神の
中にハ鏡臺をとる人の目鏡なんと携ふもしはて
雛乃かざりのそれまいらありけりふなる人ハ嘲
らめと松柏乃影まりよせてゆかりに此花ひとえり
年々にめつらしきさくちそ咲おほさき猶いくた
代乃影清まさんと千世経へきはの人のたのめし
ころやまきはる

神無月ハ春乃ことくあたゝかにして花ハ桜か枝に
さへまて便をえすると出れと其色打ちハ花てけまく
になりやまはたをしし夕陽さやくめくり夜しくけまふに
しても紅風猶りこく木葉乃雨新にそそか
て更に秋乃寝覚めむすふしならふ
霜ハ木草に枯をてきるき寒施ありしらせ
く咲かそしあるはわしくれぬす人のかしらにて
おくしてねの世乃ちら紀事をちえしあるハ暁
おしむきぬくまはえらし好之諺侍のさして形
見をとなしそら春又瓦り前く鬼乃あ訊さけ
さひぬ袖を行つらぬきはうたくし

風ハ音なふしも聞えすうら悲しきも常乃
なり朝戸をしひらけハそことられ白妙なりしは
里て木々の梢を埋ミあつしたる時に新たなる風情
清きて婦らゝ庭のけしきとゝのひみくろふくも
かゝら地ん地にありて又山しま見渡しては旅行
人恋しけそあるゝあとおもひやるあるは吉野乃
松の一本しよるまゆき夕暮乃そゝろに悲細く立の
煙るも淋し
霰ハ松に音するは竹に散るにもろく地におちて
ハ果敢なく消られ宿の鵠なとの情へなく
背を黄しけるは星乱れく見ゆ清かなる夜ハ霜

よるましおりすゝけやあはれハ誠究も又とよはそらし
氷嵐寒き夜水乃面ハ凍しりそめて日ころ乃月は
影も沈めす鏡なして日影にうつらめは魚乃かよふも
霞後ひく都浪はおとるゝめゝゑ志賀の浦遠北揚
みゆまゝ繁くらして行来なくあるは世捨人乃庵
そく道乃あとも絶しくみなまて事しら所なし
もかよふ冬梅柳ハ桐のうちれ羽情きて梅を摘き
ともろこ冬あるはしらん乍の瓶より出しまて遊ひ
ては尊し音ら梓乃ふとくむらつまき鏡乃そしと
りくして無もきのふりく初くあしたねきうす
抱ら吹けるとれ花ん西つゝそ有らと冬れ水世月

朝日にこれをきえて上り来はもとあらん此例にす
世乃作り清る事なくめぐくこゑ水あらん
千鳥の声は沖乃方にきこえて舟乃中の旅人忘
踏りはようひより霜乃松ある人めきりけきこへて
耳には世よみ所なく母子なりけり為何きれの静お
みちのりのかぎりしきらめてあきれ深かえる千きを
告てものの武士の誉衿をかさぬ二葉乃ちりて此川
風吹く積こ静飲流しかきとる人の神なりけ洗ひ
今日よりの峰の静かなるきりしあまきとしぬ所のきる
あさきに寄りて津り中高く里右山の岩佛乃こえさ
ける是なく夜毎世乃人乃心数ましてさくらに鳥のおと

きよきをりし
或は極道の寿行ま祢きて寛の宣志あるきな紀
事を帳こ独り雨開国乃中には獄具する所
なきせよきてやそらしんかに庵彼けてしあるるなくまは
を補ひては筆とりたる鏡乃おもひもの人あらめ
し衣乃化乃ありきをかしんかの奥なりし書くくし書
うきりは下にこそ祖しろの比そきこくる文あり
なしくこゝる柳は津ま子都まのさる火様あきり神
きる郭ともの人のき火桶くまこれて何おし
かくんときゆるの
風乃朝日は子祥もこのめ人もこゝに我を施りて館に

ちるまくなりてともに打いさみて隣乃餅まて云ふ
きしれくるしひ妻なる人いまくく事作打もれて
都のなきてらぬる孫を志こふ文都乃を慎し此
日より娘らとヽふ衣の出く門しりきはよひ哉
さまのきやうし花より人乃心も流されとせいしくそ
覚ゆる

〽節季候らの世をよらの神をまつく実事秋乃まの
名は見しめらくちきて打くしきとれ年くらさ来しきて
拍子よくうろひこゝに柳あとしてそらしく行きて
庭通てしこゝ人り向の竹乃走こゝる日之昭たた地

〽煤掃ひ人の気ことに埃りおよ袖て誰ともなに

又ここら旅の寡をまろくこ小昨らかすまもおらし又歳
所らされて日比とつめをたえくはまり柳乃出るる
んとしこゝるは我柳なるし播ひとる白旭るせは

〽餅突の家それ甚よ餅あまのくずけるにあまたと続けや
人くしうへして召まし賑ふ井に走こてなる女の
例の気り下知あくさし有る家の柳と共にて去
又されさは他人まで柳の枝に餅掛し星の清きて花
見ゆるよろこひこそ是むかし出しくはせし

〽戸ふしのゆりは春ことといへを日影はなきのへうち打ぬと
めでてはに不らけぬるこひをのおるし明出るて
折紙気りてやけし人こゝあ元方子棚打見

としくれ神さひ新しきうちかけわたして村にまても
うめうけとて見にさへかしこき鬼かわらひさこそ
つ人の住ところも此とは見えしなかくすゑかなる辺
とおかゆ文よむこゑしきりにおほえて五百のも
にきへあまた鶯ひとつなきたてまつれ門りは猶し
かしれとひふもれてよりかくそり立まて御のる
冬寒石すしいれありしてふえしまていかる乃かゆる
さかしき年はこれとて小漕よせける舟すりは誰も
皆は稼田ところ眠ゆる乃うちとて農わしく神
下部日さかはそのこれよせける日世のうさき志
けさ人はに宿かりしと住して住居をかさね志れる

人々行ふふくも終りけり半面銭笑ひて挿さく
此寺石にも常の所も都さそれは忘くなる人も行あさ
見てもとは柳のそ花かとさそとも弁つきしてひさへかなへ
香あつまとも河り文るくらのはいつみしてこふの記たく
中とも宍出るをはよりても上広うちまち左をし後くり
いとまのうまりもんをして時のかゆる銭もまるすも
日けるとし家々に松竹植なしくさめ縄とりつき
て御乃くさしかへるまとふ衣事にそつしき中
ふもけしきにてまたをそけりしる文おつくましき
世もりは大黒の年たき行うしあまた文をけて
おゐる神の祓もりは鈴かなる袖を実をはあらし

風のくしきも狩衣通居り化にしられあつまる八坂の
奥にておろしおはしてろこまさらくはきも
參りて火縄ふりふりつゝけまて帰る家あまたの
竈を照しさめんとはかりし人の往来は夜を絶
しけり国のとしし大りたらうらふけて去
歎のあくましを押されたりし文通へきをれりはら
しともかき尽なく名残をしく折りて咲く明るは袖
さえと力を添ふる衣のおもやかなるふうみも
待ちらく花ならまかしなにまでもなほ

旅

門出しめでたくらん日行人とはる人とまた打ちはなれぬ
袖をと見送る程見るまでたくさんとまらんかはりかおしはいのち
あらしと相抱きあふもとかはそのまゝりあふくれ往とられし
里乃ある立ち行くはまたさて椿袂分ちし流るゝ雲
のいにかれにかきありてらめるかれし山も煙なるきいへ
さてなきおもかげはさこそかれしと風雲いまる鳥
の啼く柳なくらしくあやしは遠山乃なつかしく見越
るも雲ゐのたなひく夢路しる一夏か郭公の一声は
雲のかけ橋をたどる行あるは木陰に立休らひて
汗のもの風で袖をたなく清きなからぬ道の色に

はん特まくしめて時待ば出て秋きて又名はきこえぬ
草かりしを打すぎて壺のかしり路除澤遠きを
にいかに行くとはなくて過ぬあるに又夕日程なく
くらふく待く程もなくきこえは御本津らなくて野よ
みるに人打ちおくれて西の程さへもなくときこゆる
不遠くしれなしくるはゆくし時雨乃けい笠の
雫は空なくて日影らくしり所打ぬれてこそ
花物なれ雲いまだ林ほらくは幽なる物なる本より
指ある妙りなきかなり吉野神社の木しら
こ林ずもひ出して旅乃心地懐こかりし書の
種いま加ふるもはあれる皇に符となしたる記

枕に夜るの寝ざめ待かくくれゆくあるときおく〜の音
更に鐘打の渺のたえ千鳥の声海より地絶
名の残打消乃声風は氷色は更に冷行厚く降雨
さあやらなる声の雫らさ赤染みて錦出きたく
音止まず中念仏の音声して浅くしけるさ夫
乃長味もなし来てゆかりなくぬ空の星まめ
さえ殊あきれりおもか元河の汀きても古への海の子
みわつかなくて人ほ実ある通をうしもかる折めば
し我国人乃かく数りあれていふ文字のまんと紙を
見これと傍こそき時ら汀まくしはこれ禄いたの
程あまりぬは書と思ひて掃よはなやまて窓

まそてハ来ぬるとかりかひちゝめくやうて又かり
これらそ末ハまき神な躰行して心あてなる聞に
のくさきにかるおしらきし人の心に思ふ
きれハ従しなしうけくれもしろきをおらしき
事に知れてハ人す久ま興をほ堪も古ハ
の事のしん乃徒ずし有きれハ隣にゆきとみ
しらく西ぬ又ろけき行をま起きてハひそ目く國
乃ゆうくは京滝ゟきてあまとけしあ紀よ道を
さ紀国中気ゟる程勝ゟきし物ハあらしこはら
しうつ里肩をえとあさゟる日我思ふへの本立あく
とえし神るそて神しられ笠躑き杖えしらく

色さく黒ふおし痩麻の小衣うちちれたるま仕ま
子出むちひてそふきしひあく都中けなくたく
うなんとしておハすふとおもひしくふまをを得
とるう旅しさあるんうおし旅乃あく陸しなとを
うりてのみさるのみ童僕よろこひむちへ推子門行
まつそのひとくんの程ハ國こそて神ちへしら由ハ夜
こ思ハ寝覚し旅のちうちにまそひぬる神宮天井よ
りんしきてハ我宿なるをおかゆる程ゟり有
やる又悔しく思ひし日ちうてくひしうる危ゟころ
或時ハ雨ふきる神あるんはつくろふそて泊里ハな
いそ知帰きゟしはられら留立ようんとたえひて過

ぬる我も古人のうへに村むきて一足もとに夢しか
こゝろ又来べき折りあるめと見捨しかりし
り後れ行人へとますゝもなくてやかしゝ望た
んとしころ彼乃ゐとそ惜く終

戀

心そ法界にして無量なる物なれば一念動く所は
大河の水の続なる落ちしとゞむることしきれば
まくらぬ人なし風乃便りに聞しよりなすとや
忘れかたくよし或は筆乃かよひぢを見るに魂けし
かられぬ身しるひあるは芦垣のまぢかきあたりを
見初ふ折にしきよらなる物こしを聞ては水
なくとれよりてすゞしみしますに我ぞかあるは又
通行にまりしさゝら見捨るかたくも新たに出
しるゝ我見そひかの乃家にし立よりて扇ふ
物乃價なくとる筆あふとぞふみの家れ名我

ちりてゆくもあるは花さけるけしきあるは
文神ハ佛ハ消めく日色まで女の出立る中にて
ともそめにわかれうきてハ添しるゝ便もかれと
思ふ折ゝ嫁しける時雨そしとし忘れハ筆
の跡をりをもてよりあるは文大纏と云物けし
出してうけしまらひ或ハ近きかよひ遠きへ行
とりなはもとよりはしはりかゝり行きれ
かゝ中にうしろ見たる人ありまとめこゝろを見て
家かしく便きすひさるにけめけて書かき
ひとつれらすかりて御かぬ哥ハ奥さきはし
て云ひきしはもわかしあるは文いたぬおもひ

ゆかしき歌の人あまた文つかはして折まつ程
の久しきを何ぞ詞をかりて其徳おもふとは
さま哥なるものは神しく文行ひ読みて紙の鍛もし
のそしてさはひやうにより見たくさしそ歌月詠ま
うちえて撰選なる文のおかしきは神しくあるはん
りあけるおもひ去らずして佛しなるは神まうて
折祈ふき便りつゐにおもひそは中しさまもかくも神ぬ
まつても物いきを絵かきそえてんの話うちあるし
とるしをうかまてわかりし文人さへ神ぬ通ひ路り
いとやさしくあやしき宵く毎に胸さわかしく
折しるちへしといひ無何かしくて文をたまひ

あられと言ふ物さうしやりて尾をふるまねして飼
はるをなしあるはけしからぬ開守り物あることなく
そしらるゝはゆらひこそいそらしきされ誰とたるぬ
人の例の時をもかうへきや竹吹くと球子こそ
今宵もまたあくら神来ぬるこそ者なる
さめひ　さらぬ鴫の羽かきとよみけんありしみれ
あまへて強けし星乃おもふともはかなりるゝふ
さ空吹風も音されぬたりて籟乃音をきけり
立待ちふ程さ行の軒も過ゆる村雨は孫尾ふく
ころのひやうきそ母のをとあれしられらり神そと
何もそゝるなるはいまなりて待めらやと読み

ゆく年を打ふるは孫皇の村に居きらりくて母を
横さはりひそめの刀そて一音もあまてで孫さし
ま琴柳さへいもてゆめの角息しと徐もんあまりて
う訴し寝くるて名けめて猿打ふきふきしに灯
遠く置くれの韻をもあらのうち足しそけしむるひ
あくろ床しきんもそそすりるかうし月清れなかり星
はるまろ清くしなとうゝえましつくもあそりよ星
神ころ星おかきく人のあやあるしとあさといはの
文よりあひろ神てとらつり韻らるあらありるは左紫
おお抱きしは母さきてお木田那らふさ母はなとや
うきとけ韻りてやきさんのまゝぬ人のうらや

さまんとしれ堂へ入られけるに息見しらくかよくて立
りし見そろ服とて酒るまそひろ我てられしられ
あるは文ちら地あくりたる女をえひ手文かよふりし
ふるれ山路乃夕ゟゝられと染ちえしよき指の数
さくひろりしゝ神々寄て音みきこゆる折節
二両くなすあとゝのこゑをうきをあふ釈まつかの種い人
我とさらぬ海くろの夕にけまでつ人相の鐘り
津よ乃あをれりまくてしさし暗ふら見つ堂を
ひらよ霄閣りつ津とひ東く君ふまきてのあらせ
をとけりとあらぬるのみ思ひあつ処くまつんと
そまあしられ千世をひとる頭とあるを手抱いまく

霄あらうことを乗しみてさくて阿をもらすのみいそく鳥鐘
乃動りおとろうち神くく文いろうとられ衣袖
も動散おろりれ記ひり袖らゝ水滴り走つ流て草引
おこしてむらる鯨をほろうひふりして中く部うし
たま宮乃内ゆり髪の香球ふ抱ひそつこそかへ覚
あれ又寝乃夢も見る影く何まとてもんて
まふ添つ野まぬく山うちまあ見川のなりとぞに
られ津く二人乃は水の沢漬し綿からふしくころ
め御ろ風情ならき神りうほりて我移あろうを
こゝろえゆるも浅ましあるは又たまり深まらけ
中とかし流り心乃うほりちとゝゝゝるい舟子

ほと清き神ぬちり暁の露しきは日おまれ
ほくもし車のみかへてまて流ひとつみ
おかし京しき武珍や乃うちの流しき紙

祝

ろ神に海と前ハ天地ひらく始神しより地の紀の
天子はしまり天の月ま地りまゐる天地和合の
大道まうて詞となりて神をかりて君をあかめ
世を治め身をおさむるはとはなるをしるは
先梅けちより桃の雫の盃のさしてうれしや

婦し親子小の不足甲乏と飾立なく入こみけとし
徳の葉をちそそけ菊乃白露ハ渕となる
いろし世の志をまもてをいひをふき帰来まろ入
歓ほ年抑きまの人の髭をとりの襟着袖
なんそし神子詰きんとそ出ことまろ飾さ
と歌人の枝葉肱くまし見送りまねくらん心の酒こ
そ季のもしきれ四海浪ちろかし事捨りくさ哉
はしきけきい従来に足をとめしきをかくれ不
ん農く婦かく治る国ちまきしまを民くさおう
るあひるの俳諧乃連ねいをきし称な飾万
此きうくひ小人皆露魂の齢をまてふる歌

御代々あまた会席の種

右二帖昔年比思ひ寄し事を
見し寝覚くにかいつけ置し
哉あまたあらんにはよく千及
市直其所以ゝふ事志也

鬼貫

跋

朱寛藁

古詩體變為律絕律絕變為
宋詞也東國和歌又長歌短歌
旋頭歌泊連歌誹諧也乃俳之
變也如此俳自來歌家論之制理
也然二者實不可也今見世此俳

唯法乃寔通也潤明詩書
達磨之前誰剏此法而入其時
變剏造篆古人如影法境之
而後字畫光亮黄精玄華之
用強弱之巧佐爲家以運真穎
不於家也得此時觀此見矣

猶恐時之未字勉梅
享保戊戌佛誕生日
紫野臣妙子書于清源
南軒

享保三季戊戌中秌良辰
洛陽寺町通五條上ル町
書林　新井弥兵衛藏板